

「性別」をなくすという企て

——村田沙耶香『無性教室』——

An Attempt to Eliminate Gender Differences: Murata Sayaka's *Musei Kyoshitsu*

黒 岩 裕 市

要 旨

二〇〇〇年代前半のフェミニズムへのバックラッシュの中で、ジェンダーフリー教育が「性別」をなくす企てであると攻撃の対象になった。一方、バックラッシュへの対抗言説でも、「性別」をなくすということ自体は否定的にとらえられ、結果的に性別二元論が温存されることになった。この点を批判的に問う先行研究を参照しつつ、本稿では「性別」をなくすというテーマが見られる村田沙耶香の『無性教室』（二〇一四年）を、バックラッシュをめぐる議論と関連づけつつ考察する。この作品の「私」が通う高校では「性別は禁止されている」。その「性別のない教室」がいかなるものかを検討しつつ、「性別」がなくなるということに対する「私」の不安をたどる。しかし作品終盤では「私」は「無性別の世界」をむしろ肯定する方向に向かっていく。このような展開に注目することで、性別二元論を再生産することなく、バックラッシュに抵抗する道筋を想像させるきっかけになり得るものとしてこの作品を読む。

キーワード

村田沙耶香、『無性教室』、性別、バックラッシュ、ジェンダーフリー

1. 村田沙耶香と「性別」

「性別」とは「男性と女性との別」、「雄と雌との別」と『広辞苑』などの辞書では定義される言葉であるが、単なる「別」、中立的な差異として存在するだけでなく、日常生活のさまざまな領域にまでしのび込み、私たちの身体や振舞い方や関係性や生き方そのものを細かく規定するものである。しかもそれは「性」とは一見無関係な事柄にまで波及する。そのように、「性別」とは根深く、手ごわいもののだが、「性別」の強制力を見据えつつ、そこから脱する「何か」があるとすればいかなるものなのかということを探し続けている作家に村田沙耶香がいる。本稿では、「性別」自体をなくすという発想が見られる村田沙耶香の作品を考察する。

まずは村田沙耶香の発言に注目することから始めたい。二〇一四年に開催された「文学と女性性」という座談会に松浦理英子、藤野可織、中上紀と参加した際、村田沙耶香は次のように発言している。

私は女性の性描写が多い小説を書くことが多いせいとか、女性として生きていくことに圧迫感を抱いていて、怒りをモチベーションに小説を書いているのではないかと思われることが多いです。だけど、私は怒りを原動力に小説を書いたことはないです。いろいろな既成概念が壊れたり、物事の意味が溶けて崩れていくような実験的な行為に興味があつて、その既成概念の一つとして「性別」というものがあるというだけのような気がします。⁽¹⁾

私は女性性に限らず、既成概念が壊れていくような小説を常に書こうと思っています。当たり前のようにある凝り固まった概念を柔らかくしたいという気持ちが強いです。それはどちらかといえば、怒りより純粹な好奇心、その先にある光景が知りたいという感情に根ざしている気がします。ずっとそこが壊れてほしいと願いながら生きてきたことが、自分の書くものに入り込んでいるんだと思うんです。

ここでは、「いろいろな既成概念が壊れたり、物事の意味が溶けて崩れていくような実験的な行為に興味があって」「当たり前のようにある凝り固まった概念を柔らかくしたいという気持ちが強い」、「当たり前」の「その先にある光景が知りたい」といった点が強調されている。一方で、「性別」や「女性性」も壊れていく既成概念の一つという位置づけで、「性別」や「女性性」自体には強いこだわりはないかのように語られている。

ただし、こうした発言は、「女性性または女らしさ」というものの定義も、セクシュアリティの定義も、あるいは文章の規範さえもい意味で崩れて来ているのが今の文学の現状でしょう。例えば村田さんや藤野さんが書く小説も、そういうセクシュアリティや人間の定義を崩して広げていくというようなことをなさっていると思うんですね^③。といった松浦理英子の発言を受けてのものであり、「性別」に特化した「文学と女性性」という座談会のテーマ設定を問いなおすような文脈での発言であるということも念頭に置く必要があるだろう。なお、別のインタビューで村田沙耶香は「性別からの解放の欲求が、人間であることからの解放の欲求よりも前からあったのかもしれない」とも発言しており、「人間の定義」を広げていくとしても、そこにはつねに「性別」の問題が介在しているということががえる^④。

実際に村田沙耶香の作品には「性別」という「当たり前のようにある凝り固まった概念」が壊れていくようなものがある。⁵⁾

たとえば、『ハコブネ』（二〇一〇年）という作品には女性という「性別」を脱ぎ、自分自身の「性」のあり方を模索しようとする里帆や、「性別」というルールを内面化しておらず、そこから解放されてしまっているという感覚を抱く知佳子が登場する。また、先ほど触れた座談会と同じ二〇一四年に発表された『トリプル』では「私たち十代の間では、今、カップルよりもトリプルで付き合っている子たちの方が多い。三人で付き合うという恋人の在り方は、十代を中心に、ここ五年くらいで爆発的に広がった」という世界が繰り広げられるのだが、「トリプルの恋愛が広がって、性別というものも、恋人になる上で大きな問題ではなくなってきたような感じがする」という一節がある。同年の『清潔な結婚』という作品でも、「性別のない結婚」や「無性別夫婦」といった「性別」を介在させない結婚や夫婦のあり方が探求される。⁶⁾

これらの作品には、登場人物が意図的に「性別」というものから逃れようとする形で、あるいは、結果的に「性別」が重視されなくなっていくという形や「性別」という概念の外部に存在するといった形で、「性別」という「当たり前のようにある凝り固まった概念」の絶対性や自明性が崩されることが目論まれるのだが、村田沙耶香の作品には強制的に「性別」がなくされる世界を描いたものもある。本稿で考察したいのは、そうした作品の一つの『無性教室』（初出『小説 野性時代』二〇一四年八月号／初刊『丸の内魔法少女ミラクリーナ』KADOKAWA、二〇二〇年）である。『無性教室』において「性別」という概念がいかに／どれくらい壊れていくのかという点そのものにも注目したいのだが、本稿では「性別」をなくすということが論点の一つになっていた二〇〇〇年代前半のバックラッ

シユをめぐる議論と関連づけつつ、この作品を読んでみたい。⁹⁾

2. バックラッシュと「性別」をなくすこと

二〇〇〇年代前半から中盤にかけて激化したジェンダーフリー教育や男女共同参画へのバッシングはフェミニズムへの「バックラッシュ」ととらえられるものだが、そのバックラッシュ言説では、ジェンダーフリー教育とは「性別」の解消を企てるものだという批判がしばしば出された。一方で、バックラッシュへの対抗言説ではジェンダーフリー教育とは性差別の解消を目指すもので、「性別」自体の解消を企てるようなものではないという反論が試みられた。そうした反論の本身は妥当なものであったとしても、そこにも問題がある。バックラッシュ言説のみならず、バックラッシュへの対抗言説をも批判的に再検討する風間孝や飯野由里子の論考を本稿では手がかりに、そこで取り上げられている文献を確認しつつ、バックラッシュ言説とバックラッシュへの対抗言説における「性別」をなくすという論点を概観する。

本稿でポイントになるのはバックラッシュの攻撃対象の中でもジェンダーフリー教育である。「ジェンダーフリー」について簡単に振り返ると、この言葉が日本で最初に用いられたのは、一九九五年の東京女性財団のハンドブック『Gender Free 若い世代の教師のために——あなたのクラスはジェンダーフリー?』とプロジェクト報告書「ジェンダーフリーな教育のために」であり、そこで「ジェンダーフリー」は「性別にこだわらず、性別にとらわれずに行動すること」と定義された。二〇〇〇年前後には「ジェンダーフリー」をタイトルに掲げた書籍が刊行さ

れ、一九九九年に制定された男女共同参画社会基本法の施行後は地域における条例づくりや政策議論の場においても、「ジェンダーフリー」という言葉は浸透していった。¹⁰⁾

こうした動きを受けて、二〇〇〇年代初頭から右派論壇でジェンダーフリーや男女共同参画への批判が徐々に広がっていった。当時のバックラッシュ言説は、書籍、雑誌記事、インターネットの記事（ブログ）などさまざまな媒体に登場したが、本稿では「批判マニュアルとして一定の影響力をもった」¹¹⁾八木秀次・西尾幹二『新・国民の油断——「ジェンダーフリー」「過激な性教育」が日本を亡ぼす』に目を向けてみる。

同書では「男女平等」や「性差別の解消」と「男女共同参画」や「ジェンダーフリー」が対比され、後者が「性差の解消」、あるいは「性差の否定」を企てるものだと批判される。¹²⁾そしてその根拠として、ジェンダーフリー教育を推進する教師は「男と女は基本的に生物としても違いはない」¹³⁾と主張しているとされ、次のように続けられる（発言は八木のものである）。

男女が肉体的にも差異がないという彼らの主張に話を戻せば、さらに、「人間と猿もDNAを調べれば九九%同じように、人間の男と女も体の構造はほとんど変わらない」「男も女も、もとは同じだね」と盛んに強調しています。／また、「男と女とはあまり違いがない」ということから性的関係も男女間のみならず同性同士も肯定するという「同性愛」積極肯定論に転じていくのです。／そして彼らは、「男、女という二極構造ではなく、男と女とのあいだに中間がいる」と言い、これを「性のグラデーション」と名づけます。男と女との間に中間形態、すなわち半陰陽やインターセックス、性同一性障害者などが存在するというのです。／「男と女は繋

がっていて、完全に男と女とは分けられない。自分が男だと思っている人の中にも女性が住み、自分が女だと思っている人の中にも男性が住んでいる」ことを子供たちに強く認識させようとしています。／彼らは、性ホルモンの分泌が異常だった人たちを、あたかも正常であるかのように取り上げて、たとえばオカマを講師に呼んで彼らの話を子供たちに聞かせたり、雌雄同体のカタツムリをジェンダーフリーのシンボルとして、「カタツムリは羨ましい」と吹聴しています¹⁴⁾。

ジェンダーフリー教育では「男と女との間に中間形態」が存在するということを児童・生徒に強調し、最終目的としては子供たちをその「中間」的な存在や「雌雄同体」に変えることを企てていることになるのである。少し立ち止まって考えてみれば、バックラッシュ言説は非常におかしなものである。「同性愛」、「半陰陽やインターセックス」、「性同一性障害者」と本来は異なるものを次々に挙げ、スライドさせている点や、「性差の解消」が企てられているのであれば、対象の性別によって規定される異性愛／同性愛という二元論的な概念そのものが消滅するのではないかという疑問など、引用した箇所だけでも、問題点はいくつも浮上する。だが、内容よりも、風間孝が論じるように、「具体的な性的マイノリティの存在と中性人間とを結びつけ、これらの性的マイノリティへの「フォビア」を動員することによって、ジェンダーフリー批判に人々を巻き込もう」とする戦略が展開されたのである¹⁵⁾。

人びとのフォビアを刺激しつつ利用し、漠然とした不安を煽るといふバックラッシュの戦略は功を奏し、二〇〇五年一二月の第二次男女共同参画基本計画には、バックラッシュ言説と呼応した「ジェンダーフリー」と

いう用語を使用して、性差を否定したり、男らしさ、女らしさや男女の区別をなくして人間の中性化を目指すこと、また、家族やひな祭り等の伝統文化を否定することは、国民が求める男女共同参画社会とは異なる」という一文が入り、二〇〇六年一月には内閣府から自治体へ「ジェンダーフリー」という言葉を使用しないことが適切だという通達も出された。このような動きを受けて、バックラッシュ言説は表面的には終息することになる。ただし、バックラッシュは消滅したわけではなく、現在（二〇二一年）でも「折に触れてゾンビのように復活している」ものである。⁽¹⁶⁾

このようなバックラッシュ言説に対しては、二〇〇〇年代初頭から反論が試みられ、二〇〇五～二〇〇六年頃には、女性学やジェンダー研究の研究者たちを中心に、バックラッシュに抵抗するための集会が開催され、書籍も相次いで刊行された。⁽¹⁷⁾そこではジェンダーフリー教育が「性別」をなくし、子供たちを「中間」的な存在にしようとするという主張への反論がなされた。

たとえば、二〇〇六年に刊行された日本女性学会ジェンダー研究会編『Q&A 男女共同参画／ジェンダーフリー・バックラッシュ——バックラッシュへの徹底反論』では、「ジェンダーフリー」とは、「性別をすべてなくす（性別消去、ジェンダーレス）とか、みんなを中性にしていこうことを求めているのではなく、性別による「不必要・不適切な区別」をせず、ジェンダーの抑圧から解放されることをめざす概念です。人間の中で男女の区別をなくし、一種類の「中性」人間だけにするなどということは、できるはずありませんし、ジェンダーフリー論者も求めていません⁽¹⁸⁾」と説明されている。

同書では他にも「現在、「ジェンダーフリー教育」に対して、男女の違いをまったくなくして「中性的な存在」をつくらうとするものだといった批判がなされていますが、「ジェンダーフリー教育」の目標は男女の平等を確立することであり、平等な状態を模索する手がかりとして「ジェンダー」概念を重視している点に特徴があります¹⁹⁾、「それ「ジェンダーフリー」は「男らしさ・女らしさ」を認めないことでもなく、人間を中性化したり、性別をなくしたりすることでもありません²⁰⁾」、「もしも男女差がまったくなくなってしまう」という想定も、少なくとも近未来では単に空想の上での想定にとどまるでしょう²¹⁾」といった記述の仕方です。「中性化」や「性別」をなくす企てなどということは悪意を込めた「空想」ではないかとバックラッシュへの反論が試みられる。

そうした反論の仕方に対して、風間孝は「現存する「フォビア」を動員し、具体的な表象を伴う中性人間に対し、それをフィクションとして片付けることは、ジェンダーフリー教育に対して人々が抱く不安を解消することにはならず、中性人間に対する「フォビア」への有効な介入にはなっていない²²⁾」、「現存する性的マイノリティと結びつけて語られる中性人間に対し、ジェンダーフリー教育はこのような人々を生み出さないと、その存在を否定形で語ることは、否定派と肯定派との間で「中性人間は好ましい存在ではない」とする共通認識をつくりだすことになる」と問題点を示し、「中性人間をフィクションとして片づけない抵抗の構築」の必要性を唱える。

それはまた、「2000年代初頭のフェミニズム運動がバックラッシュ派に対抗する中で、性別二元論を再生産し、性的マイノリティに対するフォビアを強化した可能性」を二〇二〇年の時点から批判的に再検討する飯野由里子の試みとも重なるものである。飯野はさらにこの時期のフェミニズムが取った「バックラッシュ派と闘うために性差別とジェンダー規範を狭く解釈するという「戦略」が、二〇一〇年代後半に激化しているトランスジェンダー

排除とも結びついたのでないかと指摘する。⁽²³⁾

なお、『Q & A 男女共同参画／ジェンダーフリー・バッシング』でも「ジェンダーフリー」が目指すのは「二〇〇人を一〇〇タイプの個々人としてその違い・多様性を尊重していく」ことだと説明されているように、バッキングラッシュへの対抗言説では「ジェンダーフリー」が「個性」や「多様性」を重視するものであるという点がしばしば強調される。⁽²⁵⁾そこに性的マイノリティを排除しない教育のあり方も含まれるということになり、風間も「肯定派が性的マイノリティの存在を肯定した教育を構想している」⁽²⁶⁾点は評価している。そうなると、ジェンダーフリー教育を肯定する論者も性的マイノリティとして括られる人びとを考慮に入れた議論をしていたことは間違いないとしても、バッキングラッシュ言説に対抗して、ジェンダーフリー教育を擁護する中で、「中性人間」を「空想」や「フィクション」として否定することを通してトランスフォビアやホモフォビアが結果的に温存されてしまうという問題点には十分に組み組めていなかったということになる。

次節以降では、そうした「空想」に基づいた「フィクション」に該当する村田沙耶香の『無性教室』を取り上げ、「性別」をなくすという「空想」を「空想」として切り捨てない形の考察へとつなぎたい。

3. 「性別は禁止されている」——『無性教室』（1）

『無性教室』では高校生の優子／ユートが一人称の語り手「私」となる。スクールバスで市街地から一五分ほどの山の中にあるという「私」の通う高校では、「校則で、校内での性別は禁止されている」（二二頁）⁽²⁷⁾。あたかもジェ

ンダーフリー教育を攻撃する目的でバックラッシュ言論において展開された「性別」をなくすという企てが具体化したかのような設定なのだが、その「性別のない教室」（二四一頁）については次のように述べられる。

私たちの学校では、「性別」が禁止されている。／学校にいない時間は自由だが、学校に在る間は、どちらでもない性として生活することになっている。／校舎の窓の外には緑しか見えない。／この学校の校舎は山の中にあるので、私たちはスクールバスに乗らないと、コンビニに行くこともできない。／ほんやりと教室の中を眺めていると、不思議な気持ちになる。／皆、そろえたようなショートカット。化粧もピアスも禁止なので、リップクリームくらいしか塗っていない。髪は短すぎず長すぎない、十センチほどの長さのショートカットと決められていて、一人称は「僕」でなければならぬ。校内でショートにすればいいのでウィッグでもいいのだが、私は面倒なので切ってしまっている。どうせプールの授業が始まれば、ウィッグは使えない。男の子の中には、金髪の坊主にして校内ではウィッグにしている子もたくさんいるみたいだ。（二〇五―二〇六頁）

世間から隔絶されたかのような校内では髪型や服装は「性別」による区別が排除され、まるで「一種類の「中性」人間だけ」になったかのように、生徒たちは「どちらでもない性として生活することになっている」。さらに、制服の下には「胸がつぶれた状態」になる「トランスシャツとよばれるぴっちりとしたタンクトップ」（二〇二頁）を着用することになっており、体格的にも「性別」が見えにくくされている。また、一人称は「僕」に統一され、「性別」を想起させる名前も使用しないことになっている。「私」の名前は「優子」だが、学校では「ユート」という

名前で登録されている。学校以外では「性別」は禁止されていないが、「自分の性別を明かすのはごく親しい人に限られている」（二二頁）といった状態である。

ただ、この学校でなぜ「性別」が禁止されているのかは明示されない。「性別が学業の妨げになるとか、ジェンダーの差別を防ぐためだとか」という理由は「私」のクラスメートのユキの口から出されるのだが、ユキ自身も「もつともらしい理由」と付け加えており、とりあえずの理由として示されている。ユキは「小学校にあがると全員ショートカットにさせられ、第二次性徴が始まるころには全員、この苦しいトランスシャツの着用が義務付けられる」とも述べており（二二頁）、小学校から「性別」は禁止されているようなのだが、それは「私」たちの学校だけのことなのかどうかも不明で、『無性教室』での「性別」の禁止という設定は「実験的な行為」というニュアンスが大きい。⁽²⁸⁾

『無性教室』からはこれ以上のことは言えないのだが、この作品と共通点のある『ハコブネ』を参照すると、「性別」をなくすという発想の背景がもう少し見えてくる。

『ハコブネ』の里帆は、自身にふさわしい「性別」のあり方を探し出そうと試行錯誤している。その過程で、伸縮性の強い素材の黒いタンクトップを着用し、胸を潰した姿を鏡に写して、「自分が元からこういう生き物であったような気がしてきた。男と女が肌の上で交じり合っている。ここからなら、第二次性徴がやりなおせる気がした。身体の発達に従うのではなく、自分の意志でもう一度第二次性徴をやりなおして、好きな性別を選び取ろう」という思いを抱く場面がある。そこには第二次性徴の「身体の発達」とは別に、自己の「性別」のあり方を自分で見出したいという願望が現れている。『無性教室』の「性別」を強制的に禁止するという設定にも同様の効果が期待さ

れているのだろう。そのためか、第二性徴以降とみなしうる大学では「こんな校則からは解放されて、男は男、女は女、好きでいられる」（二二二頁）といい、「性別のない教室」といっても、大人である教師の「性別」は禁止されておらず、それどころかいかにも男性的な言動をする教師も登場する（一四三頁）。

とはいえ、このような設定では高校までの学校の時間的・空間的な外部では「男は男、女は女」というような二元論を前提とした「性別」がしっかりと機能しており、結局はいずれかの「性別」を選択することになるといふところが予期されるのだが、「私」は高校卒業後も「このまま性別を選ばずに中性で生きる道を選ぶ人ももちろんたくさんいるけど」（二二二―二二三頁）と付け加えており、二元論的な「性別」には当てはまらない生き方が排除されるわけではない。また、「中性」という状態だけではなく、高校卒業後には手術によって「胸もペニスもヴァギナもない身体」（二二二頁）にする「無性」の人の存在（二二三頁）についても言及されており、「無性」という生き方も肯定され、可視化されている。

なお、『無性教室』では、「性別のない教室」で「性別」という概念を一時的に保留にした「私」たちの状態が「中性」であり、その中でも「性別」という概念そのものをなくすような生き方をする人びとが「無性」であるとひとまずは整理できるのだが、「中性になる手術」（二三六頁）という表現もあり、作中で「中性」と「無性」は互換的に用いられている。

ところで、「私」たちは「どちらでもない性として生活することになっている」というのだが、「性別のない教室」の中の「私」たちの言動は「男の子」に近いものである。「性別」をなくすという発想においては、バックラッシュ言説と『無性教室』は重なるが、「中性人間」として「男性の女性化」が持ち出される傾向が大きかったバックラッ

シユ言説とはこの点で違いがある。⁽²⁰⁾『無性教室』の「性別のない教室」からは、より多くの女性的な要素が消されている。「苦しいトランスシャツの着用」によって女性の胸が潰されているのに対して、男性の喉仏を隠すアイテムなどは見当たらず、男性の身体はより可視的なものになっている。「トランスシャツ」を「苦しい」と表現するのは女性の「私」とユキだけであり、男性であるコウやミズキは（混乱した「私」を安心させる文脈での発言ではあるが）「今は大人になったらみんな、好きな性別を選んで暮らせて、誰も不自由してない」（一三七頁）と「性別のない教室」を肯定し、より多くの「自由」を享受している。

こうした設定についても、『ハコブネ』を参照してみると、里帆が自分自身にふさわしい「性別」のあり方を探ろうとした出発点には、女性という「性別」が課してくるものが辛いという思いも存在した。このことを考え合わせると、『無性教室』の「性別のない教室」という「実験的な行為」にも、女性性の抑圧を遠ざけようとする狙いがうかがえる。だが、「トランスシャツ」の苦しさが示唆するように、その「性別のない教室」の中でも「私」やユキは「不自由」を感じている。だからこそ、自分にとってふさわしい「性別」を探そうと画策することになるのだが（ユキは「私」とは対照的に校則を破り「女」の恰好（一四二頁）をする、その空間でそれほど「不自由」ではない様子のコウやミズキにはそうした模索は見られない。このように、「性別のない教室」といっても、そこにも性差が読み取れるのである。

4. 「性別」を「暴きたい」——『無性教室』(2)

「私」の学校では「性別」は禁止され、「私」たちは「どちらでもない性として生活することになっている」。といっても、実質的にその禁止とは緩やかなもので、高校になれば、声や体形から「性別は一目で察しがついてしま」い、「言わないだけでどちらの「性別」なのかわかった上で生活をしている」(二〇六頁)。

だが、「本当にごく稀にだが教室の中にはどちらなのかはつきりとわからない子がいる」。そうしたクラスメートの一人がセナで、「身長は170センチはあるだろう。でも手足は男にしては筋肉が少なく、喉仏もそんなに出てはいない」(二〇七頁)。「私」はセナの「トランスシャツで締め付けられている身体がどうなっているのか、知りた」ような、知りたくないような複雑な気持ち」(二〇五頁)を抱く。「私」は「性自認が女のヘテロセクシャルのつもり」(二〇七頁)だというのが、「セナを見つめているとき、そんなことはどうでもよくなり、ただかき乱され、セナの体温に触れたくなる」(二〇七—一〇八頁)とアイデンティティが揺らがされるのである。もつとも、「性別をはつきりとは知らない関係の中で」、異性愛／同性愛という区分自体が「どうでもいいことに感じる」(二〇七頁)と「私」は述べてもいる⁽²⁾。

一方で、セナとは対照的に女性という「性別」が可視化されているユキは「私」に思いを寄せ、二人だけの空間(ユキの部屋)で「僕はユートとセックスしたいんだ」(二一九頁)と「私」に告げる。ここでは、二人とも「トランスシャツ」を着たままで、一人称も「僕」を使っており、「性別のない教室」の延長線上にある。異性愛／同性愛

という区分自体が「どうでもいいことに感じる」と言いつつも、(自身と同じ)ヘテロセクシユアル女性だと思っていたユキに告白されたことで混乱した「私」に、ユキは「ユートが僕を女だと思いつ込んでるからだ」、「この制服の中に、本当はベニスがあつたら？」と問いかけ、制服の中にあるのは「どちらの性別でもない身体だったら？」と続ける(二二〇頁)。そして、「恋に性別は関係ない」(二三三頁)と思いつつも「私」が「性別」にこだわっていることを見抜き、挑発的に「性別廃止法案」なるものが議会に出されるといつ作り話をするのである。それは「性器の部分、そして胸の部分は、生まれてすぐに手術してしまう」ようになるといつのもので、「性別」をなくすことで、「恋とセックスは、性別から完全に自由になる」(二二三頁)とユキは語り、ユキ自身やセナがすでに「実験的に幼少期に身体を無性に手術した生徒」であるとも付け加える(二三三頁)。

ユキの作り話を聞いた「私」は、身体的な「性別」がすでになくなりつつあるということに不安になり、クラスメートの「性別」を探ろうとする。特に「性別」が可視的ではないセナに対して、その思いを次のように募らせる。

セナのテノールの声は、私に甘い安らぎと凶暴な衝動を両方与える。セナの清潔なシャツに包まれて眠りたい。一方で、そのシャツを引き剥がして、セナの身体の奥に踏み込みたい。黒いトランスシャツで隠された皮膚に触れたい、暴きたい、その体温を貪りたい。(二二五頁)

他者の「性別」を識別しようとするということが「凶暴な衝動」であるという点を自覚しつつも、「私」はセナの「性別」を「暴きたい」という思いに突き動かされるのである。しかし、暴くことはできず、「セナは透명한性別のまま」

(一三〇頁)であり、「私」は次のようにいつそう不安を強くする。

数日前まではあんなに、「見えないけれど、確実にある」と信じていた性別というものが、私にはもうわからなくなっていた。本当に、そんなものはこの世界にまだ、あるのだろうか。あの校舎の中の皆は、もうとっくに手術を終えているのではないだろうか。世界中の人がもうとっくに無性になっていて、私だけが、女の身体のまま、一人で子宮を抱えて取り残されているのではないだろうか。(一三四頁)

「見えないけれど、確実にある」と信じていた性別」がもはやなくなったのかもしれない、その中で「私」だけに女性という「性別」があるのかもしれないと追い詰められた「私」は目に見える「性別」に救いを求めようとす。明らかに男性の身体的特徴を持ったクラスメートのコウとミズキのところへ行き、二人のペニスを見ることで、「私」は「性別」がまだ存在していたということを知り、安堵するのである。休日の彼らは休日の「私」やユキやセナとは対照的に、「トランスシャツ」を着ているわけではなく、二人とも一人称は「俺」を用いる。コウとミズキは「私」に「性別」を暴かれるということになり、それは暴力的な行ないであるのだが、コウは「俺たちは絶対に男だぜ。性自認も肉体もオスだよ」(一三七頁)と男性性を強調し、むしろコウ(とミズキ)のほうが、「私」よりも優位に立っているようである。

ここまでの展開をたどると、「無性」への「私」の不安を解消するのは、身体的な「性別」であり、その「性別」とは、要するに、性器——さらに言えば、ペニスの有無——が決定づけるものだけということになる。そうなると、

結局、身体的な「性別」が不明瞭な人物は「性別のない教室」の中でも例外的な存在として位置づけられるということになってしまふ。ミズキも「多分さ、高校を卒業して、完全に男と女になったら、こんな風に子供みたいに一緒に寝たりできないんじゃないかなって思うんだけど。でも、今は、学校へ行けば皆、性別がない、只の友達だからさ」（二四〇頁）と二元論的な「性別」の存在を前提に、あくまでも一時的なものとして「性別がない」空間を肯定している。

「私」もこのミズキの発言に同意するのだが、身体的な「性別」が消されたわけではないということを確認した「私」は、コウやミズキとは対照的に、身体的な「性別」をよりどころとするよりも、「恋は性別の中にあるわけじゃない」（二四一頁）と恋愛感情を重視する。そしてそれ以降、バックラッシュ言語がおぞましいものとして提示し、バックラッシュへの対抗言説が非現実的なこととして退けた「無性別の世界」（二四〇頁）へと改めて向かうことになるのである。『無性教室』の最後の場面を取り上げよう。

5. 「私たちは性別がないまま」——『無性教室』（3）

セナは「私」がクラスメートの「性別」を嗅ぎまわっていることを非難する。そのセナに対して、「私」は「自分のことをずっと性自認は女の、ヘテロセクシャルだと思ってた。でも、僕の『心』は、本当は男でも女でもないのかもしれない。どちらでもかまわずに『セナ』のことだけがただ、好きなんだから」とセナへの思いを告げる（二四九頁）。つまり、「私」の中では「好き」という感情がアイデンティティを曖昧にし、「性別」へのこだわりさ

えも凌駕することになるのである。

一方、セナは「この校舎の中になると、気が狂いそうになるときがある」と言いながらも、そうした「狂っている状態」が「僕にはそれが心地いいんだ」と続ける（二五〇頁）。「私」（やユキ）にとっては「性別のない教室」が不安をもたらすものでもあったわけだが、セナはそこにこそ居場所を見出していたのである。また、セナの態度は、コウやミズギが示していたような「自由」に「性別」を選ぶ前段階の準備期間としての「性別のない教室」というとらえ方とも異なったものである。セナは「僕はたぶん、『無性』なんだ」、「18歳になったらすぐに手術しようと思ってる」（二五〇頁）と言う。

セナは現時点での身体の「性別」を「私」に明かそうとはしない。だがそのうえで、「私」はセナと性行為を行なう。「恋をしたらセックスをしなければいけないなんて、誰が決めたの？」とも「私」は問いかけ、性行為を伴わない恋愛の可能性も示すのだが、結局はセナの「性別」を明らかにしないままでの性行為が模索されることになる（二五一頁）。ユキが「性別廃止法案」について触れた際に語ったような「性別から完全に自由に」なった「恋とセックス」の探求ともいえる。^(註)

作品の最後、高校の保健室で、セナは服を脱がないまま、「私」は「トランスシャツ」だけになる。「私」は自身の性器を「性別」を脱した、「男でも女でもない。ただ、濡れただけの穴」と述べる（二五三頁）。それは手術によって「無性」になることも別に、性器から「性別」の意味をはずそうとする企てでもある。そして、「私」が目をつぶると閉じるという条件のもとで、セナも服を脱ぎ、二人だけの性行為を作り出すような試みが、次のように展開する。

『無性教室』の最後の一節である。

暴きたかったのはこれなのだ。セナの性別が知りたかったわけじゃない。セナの生身の肌にも、触れたかった。熱を与え合いたかった。それだけだったのだ。／私は目を閉じたまま、セナの肌に触れ、舌でセナの汗を味わった。／セナがどこまで脱いでいるのかはわからなかったが、私の手も舌も、セナという一匹の動物をひたむきに味わい、絡みついた。／やがて、生殖器が、セナの「何か」に触れた。それは柔らかく濡れていた。舌なのか、勃起していない生殖器なのか、耳たぶなのか、濡れた足の指なのか……とにかく柔らかいその物体は、私の生殖器を擦り始めた。／「何か」は私の中へ入ってきた。／「何か」は私の中で蠢き、私はセナにしがみついた。セナはいつのまにか素肌にはシャツを羽織っていたようだったが、自分の手が握りしめているのが、背中なのか制服の襟元なのか、裾なのかすらわからなかった。／セナ、私たち、セックスをしている。そう伝えたかったけれど、声は出なかった。／私たちは性別がないまま、何度も達した。セナの様子は見えなかったが、声でそれとわかった。／やがて、セナの「何か」は私の生殖器を離れ、唇へと降りてきた。私はそこから溢れてくる性別のない液体を、必死に飲み込み続けていた。／遠くからチャイムの音が聞こえる。私たちは、溺れるように、シートの中で互いの身体にしがみついていた。(二五四―一五五頁)

視覚ではなく触覚が前景化する中で、セナの「生身の肌」に触れることや熱を与え合うことに「私」は喜びを感じる。セナを人間というよりも「一匹の動物」のように感じ取ろうとする点や、セナの身体と衣服が混同される点にも、既成概念から脱しようとする企てが読める。そして、最終的にはセナの「何か」が「私」の中に入るようになる。その「何か」を限定しないことで、挿入行為が行なわれていても、性行為は「性別」と結びつけられる器官を

中心に行なうべきものだという「凝り固まった概念」からは切り離されることになる。ここに、「性別のない教室」という設定によって試みられた「実験的な行為」を通して、「性別」という「当たり前」にあるものの「その先にある光景」が繰り広げられることになる。

しかしその一方で、挿入行為を伴わない性行為の可能性が探求されることはなく、しかも、「私たちは性別がなのまま、何度も達した」、「私はそこから溢れてくる性別のない液体を、必死に飲み込み続けていた」となると、「性別のない」ものだのとらえようとする企て自体は継続されているものの、「当たり前」とみなされる「性別」のある性行為に接近してしまうことにもなる。

さらに、このようにして「性別」を脱しようとするのはあくまでも「私」であり、セナがどのように感じていたのかについてはほとんど見えなくなっている。少し視線を変えれば、このことは、もともと「性別」という概念を内面化していた「私」がそれを取り払い、「無性」を選択するために、「無性」という選択肢しかないセナを利用しているとも読めてしまう。「私たちは性別がないまま」と「私」は表現するのだが、それは果たして「私」とセナで同じ状態を指すのかという点にも慎重になる必要がある。

また、こうした性行為に至ったのは、「私」のセナへの強い恋愛感情や、性行為をしたいという思いを通してであり、そこでは恋愛を強力なものとして絶対視する見方や、さらには恋愛と性行為の結びつきを「当たり前」のものとする「凝り固まった概念」が、むしろ強化されている。単にすべての既存概念が壊されるということにはならないのである。

以上、『無性教室』をたどってきた。ここで第二節で概観したバックラッシュ言説とバックラッシュへの対抗言説における「性別」をなくすということに対する議論をもう一度思い起こしてみると、「性別」をなくすという発想は、バックラッシュ言説ではおぞましいものとして煽情的に持ち出されており、バックラッシュへの対抗言説でも「少なくとも近未来では単に空想の上での想定にとどまるでしょう」と切り捨てられたものであった。このことを考え合わせると、そうした「空想」が具体化したような「性別のない教室」が強制される『無性教室』において、「性別」がなくなるということに「私」は不安になりつつも、しかし最終的には「性別」をなくすということを必ずしも否定的にはとらえないという展開、さらには「当たり前」の「その先にある光景」が模索されるという企て自体も注目に値するものとなる。ただし、こうした側面をこの作品の可能性として本稿で提示するためには、その企てが喚起するいくつかの問題点にも同時に目を凝らさなければならぬだろう。

二〇二一年現在においても、二〇〇〇年代前半から半ばにかけてのバックラッシュは終わったものではなく、折に触れて、「ゾンビ」のように復活しており、それは今の日本社会に影響を及ぼしている。そうした意味では二〇一〇年代に発表された『無性教室』も、この作品を読む現在の読者も二〇〇〇年代のバックラッシュの渦中にあるといってもいいだろう。⁴³「私は怒りを原動力に小説を書いたことはない」と明言する村田沙耶香ではあるが、その作品は終わりなく続いているバックラッシュに対して、性別二元論を、あるいは、「中性」や「無性」へのフォビアを再生産しない形で抵抗する道筋を想像させる一つのきっかけになり得るものではないか。本稿はその点に改めて光を当てようとするものである。

注

- (1) 松浦理英子・藤野可織・村田沙耶香・中上紀「文学と女性性」〔すばる〕二〇一四年二月号）二五〇頁。
- (2) 松浦・藤野・村田・中上、前掲書、二五二頁。
- (3) 松浦・藤野・村田・中上、前掲書、二四九頁。松浦理英子は「文学と女性性」というテーマに見られるような「女性性」とは「男性作家には書けない、女性性」があるという仮定のもとに夢想されるもの、または結局のところ男性が了解できる「女性性」でしかなかったように思う」と批判的に述べ、男性中心の「文学業界」が満足するようなステレオタイプ化された「女性性」を提供することを期待されるということ自体を問題化する（前掲書、二五〇頁）。
- (4) 村田沙耶香・市川真人「小説を書いて、「解放」へ向かう」〔すばる〕二〇一一年二月号）三三二頁。この発言を踏まえて、飯田祐子は、一見、「性別」を主題としていないかのような作品でも、「性別」という規範とその抑圧という問題が、つねに物語の起点」となり、「そこからの脱出が繰り返し試みられている」と指摘する（飯田祐子「村田沙耶香とジェンダー・クィア」『コンビニ人間』、『地球星人』その他の創作『DunCulture』第一〇号、二〇一九年、五九頁）。
- (5) 『ハコブネ』と『トリプル』については、拙論「性別」を脱ぐ、「性別」を着込む―村田沙耶香『ハコブネ』とジェンダー規範」〔『現代思想』第四七巻第三号、二〇一九年〕、「クィア」に読むこと、〈クィア〉を読むこと―村田沙耶香『トリプル』〔『DunCulture』第一一号、二〇二〇年〕も参照されたい。ここでは「性別」という「当たり前のようにある凝り固まった概念」がどこまで壊れるのかという点もポイントになる。
- (6) 村田沙耶香『トリプル』〔殺人出産〕 講談社文庫、二〇一六年、一二五頁。
- (7) 村田『トリプル』一四八頁。
- (8) 村田沙耶香『清潔な結婚』〔殺人出産〕 講談社文庫、二〇一六年、一六五頁、一六七頁。
- (9) 井上輝子「バックラッシュによる性別二元制イデオロギーの再構築」〔『女性学』第一五号、二〇〇八年、一四―一六頁〕ではバックラッシュ言説の論点が整理されているが、「性別」をなくすということ以外にも、村田沙耶香の作品ではしばしばバックラッシュ言説が理想化するもの（「性別役割分担家族」、「母性神話」）が壊され、バックラッシュ言説が批判するもの（「性の自己決定権」）が肯定される。バックラッシュ言説への反論を掲げるものではないのだが、村田沙耶香の作品はバックラッシュ言説への抵抗という文脈でも注目されるべきものであると思われる。

- (10) 山口智美・斉藤正美・荻上チキ『社会運動の戸惑い―フェミニズムの「失われた時代」と草の根保守運動』勁草書房、二〇一二年、二頁、四頁、七頁。
- (11) 山口・斉藤・荻上、前掲書、二八頁。八木と西尾は当時「新しい歴史教科書をつくる会」の有力者であり、二〇〇〇年代のバックラッシュに関わった勢力は一九九〇年代半ばから選択的夫婦別姓や日本軍「慰安婦」問題を攻撃してきた右派に重なっている（山口智美・斉藤正美「2000年代「バックラッシュ」とは何だったのか」「エトセトラ」第四号、二〇二〇年、八三頁）。なお、『新・国民の油断』は自民党の「過激な性教育・ジェンダーフリー教育実態調査プロジェクトチーム」（二〇〇五年発足、座長安倍晋三、事務局長山谷えり子）が、自民党議員に配布したことで知られる。本稿では、二〇〇〇年代前半のバックラッシュの具体的な動きに関して、若菜みどり・加藤秀一・皆川満寿美・赤石千衣子（編）『ジェンダー』の危機を超える―徹底討論！バックラッシュ（青弓社、二〇〇六年）や石橋『ジェンダー・バックラッシュとは何だったのか―史的総括と未来へ向けて』（インパクト出版会、二〇一六年）も参照した。
- (12) 西尾幹二・八木秀次『新・国民の油断―「ジェンダーフリー」「過激な性教育」が日本を亡ぼす』PHP研究所、二〇〇五年、三八頁。
- (13) 西尾・八木、前掲書、二八二頁。
- (14) 西尾・八木、前掲書、二八三頁。
- (15) 風間孝「中性人間」とは誰か？―性的マイノリティへの「フォビア」を踏まえた抵抗へ『女性学』（第一五号、二〇〇八年）二八頁。
- (16) 山口・斉藤、前掲書、八四頁。山口・斉藤は、二〇二〇年、杉田水脈を支持する「ネット右翼」層がツイッターに投稿した「男女共同参画予算が8兆円で、防衛費が多い」という説が二〇〇〇年代のバックラッシュの典型的な言説と対応するものであったことを指摘する。また、自民党が二〇一六年に出したLGBT政策に関するパンフレット「性的指向・性同一性（性自認）の多様性って？―自民党の考え方」の中にも、「性的指向・性同一性（性自認）の多様性を受容することは、性差そのものを否定するいわゆる「ジェンダーフリー」論とは全く異なるものであり、一線を画します。特に、教育現場等において、これらの問題を政治的に利用しかねない団体の影響に対して、細心の注意を払って対応しなければならぬ」と考えます」という一節があり、バックラッシュ言説との共通点がかがえる（<https://min.jp-east-2.storage>）。

ap1.ricloud.com/pdf/pamphlet/20160616_pamphlet.pdf。(二〇二一年三月六日、アクセス)

- (17) 山口・斉藤・荻上、前掲書、三九一四〇頁。
- (18) 日本女性学会ジェンダー研究会(編)『Q&A 男女共同参画/ジェンダーフリー・バッシングーバックラッシュへの徹底反論』明石書店、二〇〇六年、一七三頁。
- (19) 日本女性学会ジェンダー研究会(編)、前掲書、四八頁。
- (20) 日本女性学会ジェンダー研究会(編)、前掲書、五〇頁。
- (21) 日本女性学会ジェンダー研究会(編)、前掲書、七六頁。
- (22) 風間、前掲書、三〇頁、三二頁。
- (23) 飯野由里子「フェミニズムはバックラッシュとの闘いの中で採用した自らの「戦略」を見直す時期にきている」(『エトセトラ』第四号、二〇二〇年) 八五頁、八七頁。
- (24) 日本女性学会ジェンダー研究会(編)、前掲書、一七三頁。
- (25) 村田沙耶香は『朝日新聞』(二〇二〇年一月一日、一三頁)の「多様性って何だ?」という特集に「気持ちよさという罪」というエッセイを寄稿している。中学生の頃に教員が「個性」という言葉を使い始め、学校では「個性を大事にしよう」ということが力説されるようになったのだが、そこで言われる「個性」とは「ちようどいい、大人が喜ぶくらいの」他者との違いであり、「本当に異質なものの、異常性を感じさせるものは、今まで通り静かに排除されていた」ということが回顧的に語られる。そのことが「多様性」の問題へとつながられ、「多様性」という言葉のもので、「自分にとって気持ちがいい多様性」だけが尊重され、「絶望的に気持ちが悪い」「多様性」は排除されるのではないかという問いが提起される。このような問題提起は「多様性」のもとでの包摂と排除の再検討に他ならず、バックラッシュへの対抗言説を問いなおす際にも手がかりになる。
- (26) 風間、前掲書、三二頁。
- (27) 『無性教室』からの引用は『丸の内魔法少女ミラクリーナ』KADOKAWA、二〇二〇年に拠り、頁数を本文中に記す。
- (28) その「実験的な行為」の中で「トランスシャツ」が持ち出されるのだが、明らかにトランスジェンダーに関わる名称を用いつつも、『丸の内魔法少女ミラクリーナ』に収録されたバージョンの『無性教室』でトランスジェンダーに言及され

るのは、コウが「私」に「性別のない教室」で過ごしたことで、「俺のトランスジェンダーの友達も自然に手術ができてよかつたって言ってるよ」（一三七頁）という箇所だけである。ここで提示されるトランスジェンダーのステレオタイプ的なイメージも含め、「実験的な行為」の中では「トランスシヤツ」とそれが喚起させるトランスジェンダーが都合よく持ち出されてしまっていることは否めない。

(29) 村田沙耶香『ハコブネ』集英社文庫、二〇一六年、二三頁。

(30) 風間、前掲書、三二頁。本稿で引用した『新・国民の油断』の一節でも「オカマ」への言及があるが、風間が論じるように、バックラッシュ言説では男性の女性化が国家の危機とつながられて語られ、不安が煽られた。この点については、クレア・マリイ「バックラッシュにおけるさまざまなフォビアの解説」（『女性学』第一五号、二〇〇八年、三六頁）も参照のこと。

(31) これはコウとミズキがカップルであることに触れてなされる発言なのだが、コウとミズキはともに男性という性自認を持ち、男性の身体を互いに確認したうえで交際しているため、二人にとって異性愛／同性愛の区分が「どうでもいいこと」であるのかどうかは疑問が残る。

(32) 飯田祐子は村田沙耶香の作品を「ジェンダー化したセクシュアリティを消去する作品」の系列と「セクシュアリティにおけるオルタナティブを模索する作品」の系列に分け、後者の一例として『無性教室』の「性別がない」セックスについてとも言及しているが、『無性教室』は二つの系列を統合するものであると言えよう（飯田、前掲書、五四頁、五七頁）。「ハコブネ」で里帆が紆余曲折の末にたどり着いたクッションとの性行為にも同様のことが指摘できる。

(33) 読者からの反応として、矢野千晶は『無性教室』の「無性」という設定について、「不明瞭な性差は、肯定的に捉えると、固定観念に縛られない新たな性のあり方を提言する手段になり得るのではないかと考える」と述べる（『差の消滅―村田沙耶香「授乳」から「コンビ二人間」まで』、『同志社女子大学日本語日本文学』第二九号、二〇一七年、一六六頁）。また、単行本刊行後、原宿なつきは『無性教室』を読み進めていくと、最初はとっぴな発想に思えた「性別を禁止する」という設定も、「ある意味ありかも」、「っていうか、性別を当たり前前に問われる社会ってやっぱり変じゃない？」と思えてきます」と『無性教室』を「当たり前」を問い返す契機ととらえる（『WEZKY』「性別」は何を分けている？ 性別が禁止された世界で見える「その人だから好き」」(<https://wezky.com/archives/76133>)。二〇二一年三月六日、アクセス)